

石川 武敏

本に親しむ環境—図書館と古書店—

私は現在、本と密接に関係する職業に就いている。しかし、幼い頃を振り返れば、本に親しむ環境にあったとはいえないかもしれない。私はある北の地方都市で生まれた。生まれ育った地域は今でこそ大都市の一部を構成しているが、当時は市街地の辺境部に相当し、少し歩くと玉ねぎ畑の大平原が広がっていた。冬は地吹雪でどこが道かわからなくなることもあった。家には父が仕事で使う電気関係の本しかなく子どもが読んでも面白くはなかった。近所からいたいた理科の学習漫画シリーズが唯一の愛読書であり、繰り返し読んだ。近くの商店街に一軒だけ文具店を兼ねた小さな本屋さんがあり、それが私と本の唯一の接点であったが、本を買った記憶はほとんどない。貸本屋もあったが、小学校に上がる前に閉店していた。わが地域は図書館も古書店もない世界であった。ただ、小学校には、古い木造校舎の廊下の奥まったところに書架が置かれ、図書室代わりとなっており、本を借りて読むことはできた。

図書館と古書店に親しむようになったのは、やはり高校・大学に入ってからである。ブラウジングという図書館の楽しみを覚えた。分類された書架をずっと眺めていく。そこに未知の本との出会いが生まれる。古書店にも店主によって秩序化された世界があり、それをブラウジングしていくと、魅力的な本を発見することがある。店ごとにその世界が異なるのが面白い。東京まで出かけて神田や早稲田の古書店街を巡り歩いたのも今となつては楽しい思い出である。

その後、東京で図書館に就職した。私が属する図書館では、和書の収集は納本制度に支えられており、購入はあくまでも副次的なものである。ただ、意外に思われるかもしれないが、古書店とのお付き合いは結構深い。納本制度が始まったのが一九四八年。それ以前の出版物や制度施行直後のものは未所蔵が少なくない。限られた予算のなかで少しずつ古書を購入し、蔵書を整えていく。すべてを収集するのは困難だが、方針を立て、優先すべきものを定めて購入している。

ところで、仮に私ども図書館がすべての資料を完璧に集めたとして、世の研究者や知的生産に従事する者はそれが足りるだろうか。残念ながら、そんなことはない。本場に必要なのは手元に置いておかないと効率的な仕事はできない。どんなに図書館が発展しても、古書店や書店の必要性が減ずることはないであろう。

今月号は、アジアの古書店の特集である。一読していただくとおわかりのように、地域によって、古書店のあり方もさまざまである。本と人との接点とスタンスを通じて、その文化のあり方を考察することができ、比較文化の研究対象にもなり得るのではなからうか。世界を古書店という切り口で通覧した著作に『世界の古書店』ⅠⅡⅢ（丸善、一九九四〜九六年）がある。本特集は、それ以来の海外古書店通覧となるだろう。九〇年代にはなかった、インターネット古書店の隆盛、コミック古書の流通などもあり、興味深い。ぜひ、お読みいただきたい。

いしかわ たけとし／国立国会図書館調査及び立法考査局長

1956年生まれ。北海道大学文学部卒。国立国会図書館関西館アジア情報課長、関西館長、総務部長等を経て、現職。著作：『世界各国の全国書誌（改訂増補版）』（共著、国立国会図書館、1995年）ほか。